

見ゆるが如く(一七四頁參看) 契苾・渾・思結の三部と共に、舊來の住地を去りて、甘涼の間に徙らざる可らざるに至り

しが如し、此の事實は獨り新唐書に記さるゝのみならず、唐會要卷九十八にも「此來栗卒、子獨解支立、其都督親屬及

部落征戰有功者、並自磧北移居甘州界、故天寶末、取驍壯以充赤水軍騎士」と記せり、此の際に於る移徙の原因

は、必ず新唐書に示せるが如く、突厥の壓迫に基けるものなるべく、次篇(三七)に述べたる、開元年間に於ける回鶻以下

北方諸部の南徙と事情を一にしたるものなるべきを疑はず。此の事件が武后の治世中の何時に相當することなるか

は明かならず、唯だ默啜の爲に壓迫を蒙りたるに基因すといへば、天授年間(六九〇年—六九二年)以後に於ける、獨解支の

治世中の事件なりしことを斷じ得るのみ。(三八)

此の如く回鶻部長獨解支は、茲に至りて其の本據地を棄て、甘州涼州地方に移らざるを得ざるに至りしと雖、然

も注意すべきは、かの南徙したるものは回鶻の一部分に止り、他の一部分は依然として舊來の地に在りて、新に突

厥の勢力の下に附するに至りしものなること之なり。(三九) 此の事は次篇にも述べたるが如く、突厥碑文に默啜の殺され

たる後、默棘連可汗位に即き、復仇の爲直ちに Selenga 河の下流に進み、Toquz Oyuz を撃ちしかば Uiyur の

iltäbär(頡利發 俟利發)は數百人と共に東方に「逃れたり」と記さるゝによりても證せらるゝ所なるが、唐會要は前に引け

る續きに

「在磧北者、自則天後、並爲默啜役屬、仍別立都督、以統之、獨解支卒、子伏帝匄立、爲河西經略副使兼赤水

軍使」

と記して此の事情を述べ、獨解支以後、回鶻は南北の二者に別れ、各々首領を立てたるものなることを明かにせり。(四〇)